

本宮高等学校創立100周年記念式典

福島県高等学校長協会長 祝辞

平成26年10月25日（土）13時30分

本宮高校第一体育館

ただいま御紹介いただきました、福島県高等学校長協会会長を務めております安積高等学校長の久保田範夫でございます。県高等学校長協会99人の校長に代わりまして、お祝いの言葉を申し述べます。

**福島県立本宮高等学校の創立100周年**を心からお祝い申し上げます。

また、本日、感謝状・表彰状を受賞された皆様に、重ねてお祝い申し上げます。

さて、本校は、大正4(1915)年4月、福島県本宮実科高等女学校として創立されましたが、以来、地域の女子教育の大きな力となり、農業・商業など地域振興を担ってきた100年の歴史という時の積み重ねは大変なことであります。

因みに、県北地区の県立学校、全日制・定時制高校、特別支援学校の本校・分校を合わせると21校（本校19校・分校2校＝全日制高校16校・定時制1校、特別支援学校2校・分校2校）になりますが、その中で創立100年を超える学校は、福島明成高校118年、橘高校と福島商業高校が117年、福島高校と盲学校が116年、川俣高校106年、そして**本宮高校100年の7校**ということになります。

蛇足になりますが、「もとみや」という地名自体も、古くは本<sup>ほん</sup>牧<sup>もく</sup>と呼ばれ、11世紀には、南達地方一帯の総鎮守、安達太良神社に由来して、現在の本宮となったと言われ、約1000年の古い歴史を持っています。

さて、私は、雪が3メートルも積もる只見高校の新採用時代から現在まで、新たに赴任した学校では真っ先に校歌を覚えて歌えるよう心がけてきました。それは、校歌の歌詞にはその学校の創立以来の校訓や精神が込められていることが多いからでありますし、また、校歌を声高らかに歌うことによって、その学校と生徒を好きになれるからであります。

今回、本宮高校の校歌を拝見して、非常に感心したことがあります。

時系列で見ると、まず校歌が昭和7年に誕生<sup>まゆみ</sup>し、その後一部が改訂<sup>ささと</sup>されましたがその三番に、「動かぬ山と 尽きせぬ水と 真結身の錦 彩る郷土の」と歌われ、昭和24年に設定された校章には「三つ葉のまゆみ」がデザインされ、更に、創立90周年事業の一環として校訓である真結身の教え「真摯 結束 身命」が設定されました。校歌、校章、校訓の三つが一体となってハーモニーを奏で、本宮高校の教育を端的に表す形になっています。

この「まゆみ」という木は、材質が強い上によくしなり、古来弓の材料として知られ、こけしや将棋の駒としても作られたのですが、そこには「真弓のように強く育て」との地域や教員の思いが込められています。

また、まゆみは「檀」とも書きますが、高級和紙である檀紙<sup>だんし</sup>の原料であったことについても、ご存じの方が多いことと思います。

檀紙は、『源氏物語』や『枕草子』にも「陸奥紙」として登場するなど、平安時代以後、高級紙の代表とされ、徳川将軍による朱印状も原則として檀紙が用いられるなど、和紙の中でも重要な位置を占めていたようです。また、和歌の贈答や気持ちの遣り取りが手紙という「紙」を媒体として行われてきたのであり、まさ

に日本の伝統文化を支えてきた日本の文化そのものと言ってもいいのではないでしょう。

そして、その和紙を大切に使う本校の書道部は、（先ほど、教育委員長さんより話がありましたが、凄いことなので再度紹介しますが、）平成24・25年度に国際高校生選抜書展（書の甲子園）など全国レベルで入選、県高校書道展においては優秀学校賞（団体賞）を平成21年から5年連続で受賞するなど、目覚ましい成績を残しています。

紙は学校文化をしっかりと支えています。生徒の皆さんが学校で過ごす時間の中でも、紙でできた教科書、ノートと接している時間が最も長いはずです。もちろん、学校もICT化が進み、電子黒板や、パソコンを使った授業が導入されるようになり、生徒の皆さんの使う辞書も、以前は国語辞典、古語、漢和、英和、の少なくとも4冊の辞書を入学当初に買ったはずですが、最近では辞書を買ったとしても、電子辞書一つを買えば何十冊もの辞書が入っていて、手軽に持ち運びができる時代になりました。

しかし、私は、学校で学ぶことを確実に身に付けるためには、紙の存在が欠かせないと考えています。英単語を見る、自分で発音する、手を使って紙のノートに書く、何度も書く、指が痛くなるほど書いて、一晩でボールペンのインクが半分になるまで書く、この地道な繰り返しが記憶を定着させ、40年50年経っても忘れない、或いは忘れていてもちよつとしたきっかけで、例えば平家物語の冒頭「祇園精舎の～」がすらすらと出てくる、ということになるのだと思います。

こうしてみると「まゆみ」の木から、生きていくための狩り、狩猟に使った弓が生まれ、同じ「まゆみ」の木から日本の文化そのものと言っていい陸奥紙が生まれたということは実に不思議なことでもあります。

本宮高校が伝統として受け継いでいる真結身まゆみの教え「真摯 結束 身命」は、真理の探究、真摯な取組み、互いに助け合い友情を結び協調し合い、自他の生命を尊重し健全な心身をつくることでありますが、これは正に大震災を経験した福島の高校生達の、福島県民のこれからの在るべき姿でもあります。

この真結身まゆみの教えをモットーに、勉学と部活動の文武両道を目指して励んでいる本宮高校の生徒の皆さん、古い文化と豊かな自然に恵まれた南達なんたつを含めた安達地方が「陸奥のまゆみ紙」「陸奥紙」の産地であったこと、その紙が学校文化を、そして皆さんの勉強を支えていることを忘れずに、ふくしまの、東北の、日本の、そして世界のためにできることを早く見つけて、本校の地元定着率は高いと聞いていますが、将来、地元福島の再生・復興のために力を発揮する人となってください。

本校の卒業生は約17000名を数え、国内外の各界で活躍していると伺っていますが、その先輩の方々や地域の皆さんが見守ってくれています。また、きめ細やかな配慮に基づく指導をする面倒見のよい先生方が導いてくれます。

本宮高校の生徒の皆さん、（校長先生の式辞にもありましたが、形ではなく内なる精神を継承することが伝統であることをしっかり心に留めて、）夢を見つけ、その夢に向かって、時には生きるためにまゆみで作った弓のような強さとしなやかさを発揮しながら、日本の文化を支えてきた「陸奥のまゆみ紙」に思いを馳せて、充実した高校生活を送ってください。

長くなりましたが、私のお祝いの言葉といたします。

本日は誠におめでとうございます。